

です。

帰ってから昭和四十年頃まで、護岸の石屋をしていましたが、私は石積みをしなから、昭和四十五年頃に独立をし現在に至っております。約三十年間土木関係の仕事をしているわけでありませう。

親の反対を押し切って海軍を志願したのですが、幸いに、フィリピン戦にも行かず、高射砲隊でありましたが空襲で弾も受けず、生きて還ることができました。一番喜んでいたのは母親であったかもしれませんが。

## 自分の海軍歴

### 駆逐艦「涼月」

長崎県 牧 尊

私の海軍の兵籍番号は「徴佐世保、機三三七四」でありますから、大正十一年四月四日生まれ、志願でなく昭和十七年徴集兵でありました。以前海軍という志願が多かったのですが、大東亜戦争が始まる頃にな

ると徴兵や召集の兵隊が段々と多くなったといえます。

私の父は朝鮮の元山で建築関係の大きい仕事をやっていたのですが、父は病気で死んでしまい、家には母、兄、姉がおり、私は末子でありました。昭和十二年、十五歳で朝鮮鉄道元山機関区に入社しました。鉄道は鉄道なりの教育がありました。

初めは庫内手、続いて機関助手見習となり、運転の見習となり、さらに機関助手本務と進みます。本務は機関車の釜炊きが本番で、これができるようになって助手としては一人前となるのです。その頃、外人の子供が機関区に遊びに来ていたので機関車に乗せて、上司から叱られたこともありました。

列車は京城―牡丹江までの朝鮮と満州を結ぶ広軌道の国際線でありました。我々乗務員は朝鮮、満州間で交替するのであります。

昭和十八年一月四日、佐世保海兵団へ入団ということになりましたから、昭和十二年入社から十七年暮れまで朝鮮鉄道で一人前の運転、機関士として勤務したことになります。私のことは、長姉が一番心配をして

くれていました。私は入団の時は家に帰らず、元山（佐世保海兵団への直接入団でありましたから、母や姉は随分心を痛めていたことと思います。

海兵団での初年兵訓練三カ月は酷いものでありませんでした。基礎訓練、学科、カッター、機関の勉強と、休む暇なき毎日でありました。しかし、鉄道ではありますすが機関士としては一人前になっていましたので、技術や汽缶（ボイラー）関係のことは、未経験者とは異なり比較的苦勞は少なかったと思っています。

海兵団機関科の同年兵は約三〇〇人の教育が終了し、私は昭和十八年四月、機関士であったので一等駆逐艦「涼月」に乗員を命ぜられました。「涼月」は、「月」クラスという最新の大型の駆逐艦（解説①）であり、乗員は三五〇人でありました。

私の勤務場所は、機関部の主機関部であり、ボイラーの燃料は重油でした。機械部の場所は船の一番底、文字通りの板子一枚下は海であり、艦上のことも、海のこととも見えない縁の下での心臓を動かす勤務でありました。

しかし、艦内では、朝晩、古兵や上司から檣の棒（バット）で尻を叩かれます。自分の責任でなくとも連帯責任でやられるのです。初年兵同士はお互いに紫色になった尻のあざを見せあつたものです。夕食を食べた後、寝るまで叩かれます。同年兵は、機械、汽罐（かま）、電気、保機とあり、各一人の初年兵で、五人は同罪です。艦は一人の過ちでも艦全体が沈む、一蓮托生ですから、初年兵の時から徹底的にしごかれ、全体で覚えさせるのだとは判っていても、辛い毎日でありました。言い訳はしない海軍魂は、日と共に養成されていくのであり、このようなことが、戦闘に入るまで毎日続きました。

駆逐艦の任務は単独で行動することはほとんどなくなり、戦艦、航空母艦、巡洋艦等の護衛が主となりましたが、敵の潜水艦攻撃のため駆逐艦のみでパラオに出動したこともありました。

また、ソロモンで護衛の輸送船がやられ、ブナへ陸軍の兵隊を運んで基地へ行き降ろし、トラックへ戻りました。当時、ラバウルは陸軍の基地なので、輸送船

ではやられるので、駆逐艦が武器や弾薬を運びました。トラック島を出てから海戦もやりました。敵戦闘機のグラマンと高角砲で対空戦もやりました。

昭和十八年末、航空母艦の護衛で、トラック島から横須賀軍港へ帰りました後、昭和十九年一月十日、船団護衛で呉軍港から豊後水道を出て、四国がかすかに見えていた所（宿毛南方）で潜水艦の魚雷攻撃を受けました。

「涼月」の艦橋の前が轟沈のように切れて沈んでいきました。機械部と一汽罐が残り、後部（艦尾）も魚雷でやられ、兵室にいた者も多く戦死・傷しました。

艦橋の前部がやられた時は、艦長以下二十七人の将校のうち二人を残し他は戦死しました。艦底の火薬庫も爆発したのですから「涼月」は、艦も兵員もほとんど全滅というところでした。私はその時、艦底の機械部にいたので戦死せずに済み、艦の乗組員は三分の二が戦没、生存者は百何人かに過ぎません。

「涼月」は、前部と後部の一部、船体の四〇%を失ったのですが、残部が少し浮いていたので、全員で手押

しポンプで水と油を汲み出し、浮いた部分を僚艦「秋月」が引張って、四国から曳航され呉へと帰りました。もし、外海であったなら、我々生き残りも、艦そのものも海没してしまつたのです。その後、度々の海戦で「涼月」は沈没を免れた強運の艦（解説②）であり、呉工廠で短期間に修復することができました。

復活した「涼月」は、硫黄島へも行ったと聞きました。昭和二十年四月七日、戦艦「大和」以下十隻の海上特攻隊（大和・軽巡洋艦・駆逐艦八隻）の一艦として出撃しましたが、九州南西の洋上で、米艦隊の艦載機延べ三〇〇機以上の攻撃を受け、主力は全滅し、沖繩突入作戦を断念したといえます。その時「涼月」は、猛烈な空襲を受けて、二度、三度、艦の半分を失い操艦機能を失ってしまったが、超低速で佐世保に帰つたということでした。

私は、その前に退艦して（解説③）横須賀の海軍工機学校魚雷艇訓練所で三カ月間教育を受け、川棚の魚雷艇訓練所（特攻基地）でさらに三カ月教育を受け、佐世保の防備隊に入りました。

魚雷艇は「八六四号艇」で第三三嵐部隊へ入りましたが、昭和二十年五月頃、佐世保から宮崎の油津が嵐部隊の本隊となったので、艇は宮崎県南那賀郡明津港を根拠地としていまして、そこが、本土防衛の基地となりました。

艇は三隻あって、一艇は艇長以下九人であり、第八六四、第八六五、第八六六艇で、震洋艇の大型、ペニヤ板製十四トン、長さ十七メートル、二五ミリ機関砲二門、一三ミリ機関銃二機、航空魚雷二本を抱いて、爆雷を六個装備してあります。艇長は学徒動員の少尉でありました。

前の明津では米戦闘機のグラマン、カーチスホークP51の攻撃はありましたが、川棚後は水上特攻隊基地ではありましたが、出動の前に終戦となったから割合犠牲は少なかったのです。もし、強運といえども「涼月」に乗り組みが続いていたなら、私は沖繩特攻の空襲で生きてはいなかったと思います。

想えば、自分の海軍歴は「駆逐艦涼月」につきまします。「涼月」乗り組みの時の犠牲で、戦友は二分の一になっ

ています。空戦に海戦に、対潜戦で、もしあの時、あそこにいたら、生死は紙一重でありました。宿毛で、艦長以下幹部が艦橋と共に沈んでいった時のことは、今も忘れることができません。(解説④)

今も戦友会をやっていますが、「涼月」の時の戦友は戦死して少なく、特攻基地は川棚だったので九州の人が主ですが、幹部は学徒だったので東京の人も多いのです。我々も段々と年齢を重ねて来て、余り遠くへ行かなくなりました。

終戦になって、九州の者は早く故郷へ帰ることができましたが、我が家は北朝鮮の元山だったので、三八度線を越えるのに随分苦労したといえます。幸いに犠牲は無く、野宿をしながら、着のみ着のまま帰って来ました。

私は、昭和二十年九月二日、母の兄、伯父のいる長崎県有明町に帰ることができましたが、朝鮮元山の母達の消息も不明でしたし、兄は陸軍で羅南に入隊しており、帰って来て母子が一緒になれたのは、昭和二十一年五月頃でした。私も朝鮮鉄道に七年いましたし、

軍隊には昭和十八年一月から終戦までいましたが何にもならなかったのです。

しかし帰ってから、鉄道の経験により昭和二十年十一月、島原鉄道に入りました。当時の島鉄は軽便鉄道でしたが、現在の島鉄を作ることができました。

特に思い出とすることができるのは、昭和二十五年五月、天皇陛下のお召し列車が、島原鉄道に入って来られるので、多くの機関士の中で第一選抜となり、運転しましたこと、軍隊時代で言えば、大元帥陛下のお召し列車を運転できたのは忘れられない一つの感激でありました。

### 【解説】

① 駆逐艦「涼月」の諸元

基準排水量 二七〇一英トン

常備状態排水量 三四七〇トン

水線長 一三二メートル

量大幅 一一・六メートル

馬力 五二・〇〇HP

速力 二三ノット

備砲 一〇センチ高角砲八門

魚雷発射管 六一センチ四基

完成年月 昭和十七年十二月二十九日

所謂「月クラス」と名付けられた大型・最新駆逐艦の三番艦として建造された。同クラスの艦は昭和十七年六月竣工した「秋月」を第一番艦とし、二番艦「照月」同年八月竣工。以下、「涼月」「初月」「新月」「若月」「霜月」「冬月」「春月」「花月」「宵月」。

最終竣工（二十年四月）は「夏月」で、僚艦は十二隻である。

建造は「涼月」以下五隻は三菱長崎造船所、舞鶴海軍工廠四隻、佐世保海軍工廠二隻、浦賀ドック一隻である。うち六隻は海没し、「涼月」以下六隻は終戦時残存した。「涼月」は僚艦「冬月」等とともに、その船体は福岡県若松港の防波堤に利用されたという。

他の「春月」「宵月」「夏月」「花月」は戦後、ソ

連・中国・英国・米国にそれぞれ引き渡された。

② 「涼月」の強運と「月クラス駆逐艦」の戦歴と沈没場所

「涼月」は、牧尊氏の証言の如く、昭和十八年三月以後、航空部隊基地用物件等を搭載し、南洋諸島・ソロモン地域、内地間を航行、海戦等に参加し被害を受けつつも健在であった。

第二艦「照月」は「涼月」竣工時ガダルカナルで海没（南太平洋海戦・第三次ソロモン海戦等参加）した。

他の僚艦「新月」は十八年七月五日、クラ湾海戦。「秋月」はガダルカナル増援、マリアナ沖、比島沖海戦など参加し、十九年十月二十五日、ルソン海峡東で海没。

「初月」もマリアナ沖、比島沖海戦参加し、「秋月」と共に沈没。「若月」ブーゲンビル沖、マリアナ沖、比島沖海戦参加し、十九年十一月オルモックにて沈没。

「霜月」はマリアナ沖海戦等の参加し、十九年十

一月二十五日、ボルネオ西方で沈没したのである。

「涼月」は、ウェーク島輸送作戦途中、高知県宿毛南方で雷撃により艦橋前部と、艦尾を切断、船体の前後部を失いつつ沈没をまぬがれた。更に十九年十月十六日、雷撃受け復旧修理中であったため、レйте海戦に参加できず、結果的には海没を免れたのである。

更に、昭和二十年四月七日、戦艦「大和」と共に沖繩突入の水上特攻隊の一艦として出撃、途中の九州南西海上で米艦載機延三〇〇余機の猛空襲を受け、同行駆逐艦八隻中四隻沈没、「涼月」は艦の半分をもぎ取られ、操艦できないながら、超低速で後進しつつ佐世保軍港に帰港できた。

このように「涼月」はまれにみる強運であり、牧氏は、同艦の人修理中に退艦し、水上特攻隊となつた故、「涼月」も牧氏も強運であったのである。

### ③ 魚雷艇訓練所―川棚

臨時魚雷艇訓練所Ⅱ昭和十九年五月一日～昭和二十年三月二十一日まで、川棚（長崎県大村湾沿岸）

に水雷学校分校を設置して訓練所とした。ここは水上特攻隊の震洋乗員の教育訓練を行っていた。

同所は昭和十九年八月一日、川棚警備隊となり、二十年三月一日、川棚突撃隊に改編されたが、従前の任務（佐世保防備隊）を継承していた。その後、震洋艇は増産され川棚と鹿児島湾江の浦で訓練を受けた乗員と共に逐次震洋隊を編成し、比島、台湾、南方諸島、小笠原諸島、南西諸島（沖繩等）、支那沿岸、海南島等に分散（内地―三浦半島、四国、九州等）し、敵来襲に対する特攻突撃に備えた。

川棚突撃隊は、昭和二十年九月二日まで内地防衛特攻を準備し終戦となる。（海軍恩給加算調査―参考）

④ 「涼月」の戦歴 「海軍加算調査」による

昭和十七年十二月～十八年一月十四日「戦務丁」―昭和十七年十二月二十九日竣工。

昭和十八年一月十四日、横須賀。一月二十五日～同年三月十六日、呉。同年五月二十二日～五月三十一日、佐世保。六月十九日～昭和十九年一月十八日、

呉。以上「戦務甲」

同年同月十九日～八月一日「戦務丁」である。

この時が前述の昭和十九年十六日、ウェーク島輸送作戦途中、宿毛での電撃による、艦体切断、呉海軍工廠において修理というより、艦首、艦尾修復の期間であろう。復帰は同年八月二日～十月十七日、呉「戦務甲」と加算が復活しているのは、再度呉軍港を母港として戦務参加である。

ところが、十月十九日～十一月二十日まで、呉であるが戦務の空白がある。この間が、十月十六日、潜水艦の電撃により艦首部分修復中と見られるであろう。

十一月十二日～十二月八日、呉。

十二月九日～二十年一月二十八日、大分。

一月二十九日～二月十一日、大分。

二月十二日～四月八日、呉。

四月九日、佐世保。以上「戦務甲」

昭和二十年四月十日～九月二日（終戦）佐世保「戦務丁」、同年十一月二十日除籍とある。

「大和」との沖繩特攻後の佐世保帰投時以降が戦務丁である。

## 対空・対潜・船舶警戒隊

福岡県 小関 正勝

私は北海道の釧路で生まれましたが、七歳の時父が死亡したので、復員して帰ったのは母の妹の家でした。本籍は大分県日田郡、現在の天が瀬でありました。

大正十二年一月六日生まれで、昭和十八年徴集兵、翌十九年二月一日、海軍へ徴兵で、佐世保第一海兵団へ現役兵として入団しました。二月十一日、印鑑を持って旅費を取りに来いと言われました。

入団十日目のこと、突然「衣囊を片付けろ」と言われ、初年兵二十人くらいが、衣囊に衣服等をつめ、担いで博多の築港に待っていた病院船に乗せられることになりました。博多には、我々を引率する転勤下士官がおられ、下士官に付いて旅館に泊めてもらいました。

各自、旅費として三百円（当時としては大金）支給されていたので、運賃、宿泊料は各人払いということがありました。

博多を朝出帆し船は朝鮮の釜山へ着岸しました。次に列車に乗り換え北上、「羅津特根」といわれました。羅津特別根拠地隊に入隊したのであります。

羅津では十日間くらい、軍人としての初歩の訓練、行進間の敬礼などを教わりました。二月の北鮮は九州で生活していた我々にとっては酷しい寒さが身にしました。文字通り凍みついていました。当時の写真を見ても持っていますが、銃剣術や各班毎に行進や紅白に分かれての演習などでした。この特別根拠地隊は教育隊のようなものであります。

ある日、大きな船が羅津港に入ってきて、我々の仲間二百人くらいが乗り込むと、直ちに出港し着いた所が、なんと日本の内地、新潟港で、今度は陸路、鉄道で横須賀の海兵団へ入って、船舶警戒隊に入隊となりました。三月十日のことでした。

四月十五日、命令により海兵団を退団し、自分が三